日蓮大聖人御書全集

そやどのごへんじ

曾谷殿御返事

じょうぶつようじんしょう

(成仏用心抄)

新版
1433
〜
1435

そやどのごへんじ じょうぶつようじんしょう

曾谷殿御返事（成仏用心抄）

けんじ ねん がつ にち

建治2年（'76）8月3日

55歳 曾谷殿

そ ほけきようだいいち ほうべんぼん い しょうぶつ ちえ

夫れ、法華経第一の方便品に云わく「諸仏の智慧は

じんじんむりよう うんぬん しゃく い きようえんむへん ゆえ

甚深無量なり」云々。釈に云わく「境淵無辺なるが故に

じんじん い ちすいはか がた ゆえ むりよう い

甚深と云い、智水測り難きが故に無量と云う」。

きようしゃく こころ ほとけ 成 みち きようち

そもそも、この経釈の心は、仏になる道はあに境智の

にほう きよう ばんぼう たい い ち

二法にあらずや。されば、境というは方法の体を云い、智

じたいけんしょう すがた い きよう ふち

というは自体顕照の姿を云うなり。しかるに、境の淵

辺 深 ととき ちえ みず 流 恙

ほとりなくふかき時は、智慧の水ながるることつつがなし。

きょうちがつ

そくしんじょうぶつ

ほつけいぜん

きょう

この境智合しぬれば、即身成仏するなり。法華以前の経は

きょうちのおのべつ

こんきょうほうべん

ゆえ じょうぶつ

境智各別にして、しかも権教方便なるが故に成仏せず。

いま ほけきょう

きょうちいちによ

かいじごにゆう

しぶつちけん

今、法華経にして境智一如なるあいだ、開示悟入の四仏知見

覚

じょうぶつ

ないしよう

しようもん

しゃくしぶつ

をさとりて成仏するなり。この内証に声聞・辟支仏さら

およ

つぎしも

いつさい

しようもん

しゃくしぶつ

し

に及ばざるところを、次下に「一切の声聞・辟支仏の知る

あた

と

こと能わざるところなり」と説かるるなり。

きょうち

にほう

なにもん

なんみようほうれんげきよう

ごじ

この境智の二法は何物ぞ。ただ南無妙法蓮華経の五字な

ごじ

じゆ

だいじ め

い

けつちようふぞく

り。この五字を、地涌の居士を召し出だして結要付嘱せし

たも

ほんげふぞく

ほうもん

い

め給う。これを本化付嘱の法門とは云うなり。しかるに、

じょうぎようぼさつとう まつぼう はじ ごひやくねん しゅつじょう きょうち

上行菩薩等、末法の始めの五百年に出生して、この境智

にほう ごじ ひろ たも み きょうもんかつかく

の二法たる五字を弘めさせ給うべしと見えたり。経文赫々

めいめい たれ ろん

たり、明々たり。誰かこれを論ぜん。

にちれん ひと おんつか

日蓮はその人にもあらず、また御使いにもあられども、

じよぶん 粗々ひろ そうろう すで じょうぎようぼさつ しゃか

まず序分にあらあら弘め候なり。既に上行菩薩、釈迦

によらい みようほう ちすい う まっだいあくせ ここう しゅじよう

如来より妙法の智水を受けて、末代悪世の枯槁の衆生に

なが 通 たも ちえ ぎ しゃくそん じょうぎよう

流れかよわし給う。これ智慧の義なり。釈尊より上行

ぼさつ ゆず あた たま にちれん にほんこく

菩薩へ譲り与え給う。しかるに、日蓮、また日本国にして

ほうもん ひろ

この法門を弘む。

また、これには総別の二義あり。総別の二義少しも相そむ

じようぶつおも

りんねしようじ

基

れい

けば、成仏思いもよらず。輪廻生死のもといたらん。例せ

だいとうぶつ

だいじゆるく

しやかによらい

げしゆ

こんにち

しようもん

ば、大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は、

まった

みだ

やくし

あ

じようぶつ

たと

たいかい

みず

全く弥陀・薬師に遇つて成仏せず。譬えば、大海の水を

けない

汲

きた

けない

もの

みなえん

触

家内へくみ来らんには、家内の者、皆縁をふるべきなり。

く きた

たいかい

いつてき

さしお

しかれども、汲み来るところの大海の一滴を閣いて、また

たほう

たいかい

みず

もと

だいへびやくあん

たいぐち

他方の大海の水を求めんことは、大僻案なり、大愚癡な

ほけきよう

たいかい

ちえ

みず

う

こんげん

し

わす

り。法華経の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて、

よそ

こころ

移

かなら

りんねしようじ

禍

余へ心をうつさば、必ず輪廻生死のわざわいなるべし。

ただし、師しなりとも、誤あやまりある者ものをば捨すつべし。また、

捨すてざる義ぎも有あるべし。世間・仏法の道理せけん ぶつぽう どうりによるべきなり。

末世まつせ そうとうの僧等ぶつぽうは、仏法の道理どうりをばしらずして、我慢がまんに著じゃくして、

師しをいやしみ、檀那だんなをへつらうなり。ただ正直しょうじきにして少欲しょうよく

知足ちそくたらん僧そうこそ真実しんじつの僧そうなるべけれ。文句もんぐの一いちに云いわく

「既すでにいまだ真しんを発ほつせざれば、第一だいいちぎてん義天はに慙もろもろじ、諸もろもろの

聖人しょうにんに愧はず。即すなわちこれ有差うしゆうの僧そうなり。觀慧かんえもし発ほつせば、即すなわ

ち真実しんじつの僧そうなり」云々うんぬん。

涅槃經ねはんぎょうに云いわく「もし善比丘ぜんびくあつて、法ほうを壞やぶる者ものを見て、

お かしやく くけん こしよ まさ し ひと

置いて、呵責し驅遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人

ぶつぼう なか あだ よ くけん かしやく こしよ

は仏法の中の怨なり。もし能く驅遣し呵責し挙処せば、こ

わ でし しん しょうもん うんぬん もん なか ほう やぶ

れ我が弟子、真の声聞なり」云々。この文の中に、「法を壊

もの み み お かしやく

る者を見て」の「見て」と、「置いて、呵責せずんば」の「置

よ よ しんぷ そ しだん ちけんじごく うたが ほけきよう かたき み

いて」とを能く能く心腑に染むべきなり。法華経の敵を見

お 責 しだん むけんじごく うたが

ながら、置いてせめずんば、師檀ともに無間地獄は疑いな

なんがくだいしい もろもろ あくにん じごく お

かるべし。南岳大師云わく「諸の悪人とともに地獄に墮ち

うんぬん

ん」云々。

ほうぼう せ じようぶつ ねが ひ なか みず もと みず

謗法を責めずして成仏を願わば、火の中に水を求め、水

なか ひ たず
の中に火を尋ぬるがごとくなるべし。はかなし、はかなし。

ほけきょう しん たも ほうぼう かなら じごく 墮
いかに法華経を信じ給うとも、謗法あらば必ず地獄におつ

べし。うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんがごとし。

どつけ ふか い ほんしん うしな ゆえ
「毒気は深く入って、本心を失えるが故に」はこれなり。

きょう い しょうぶつ ど つね し
経に云わく「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに

しょう しんごん すみ ぼさつ
に生ず」。また云わく「もし法師に親近せば、速やかに菩薩

どう え し ずいじゆん がく ほうじや ほとけ み
の道を得、この師に随順して学せば、恒沙の仏を見たて

まつることを得ん。釈に云わく「本この仏に従って初め

どうしん おこ ほとけ したが ふたいじ じゆう
て道心を発し、またこの仏に従って不退地に住す」。ま

た云わく「初めこの仏菩薩に従つて結縁し、またこの仏

ぼさつ じょうじゆ うんぬん

菩薩において成就す」云々。

かえ がえ ほんじゆう 違 じょうぶつ

返す返すも本従だがえずして成仏せしめ給うべし。

しゃくそん いっさいしゆじよう ほんじゆう し じゆ しん とく そな

釈尊は一切衆生の本従の師にて、しかも主・親の徳を備

たも

え給う。

ほうもん にちれんもう ゆえ ちゆうげんみみ さか どうり ゆえ

この法門を日蓮申す故に、忠言耳に逆らう道理なるが故

るぎい いのち およ

に、流罪せられ、命にも及びしなり。しかれども、いまだ

懲 そうろう ほけきよう たね ほとけ 植 手

こりず候。法華経は種のごとく、仏はうえてのごとく、

しゆじよう た

衆生は田のごとくなり。

もしこれらの義ぎをたがえさせ給たまわば、日蓮にちれんも後生ごしようは助けたす

申もうすまじく候そうろう。恐きよう々きよう謹言きんげん。

けんじにねんひのえねはちがつみつか
建治二年丙子八月三日

にちれん かおう
日蓮 花押

そやどの
曾谷殿